

長谷川智恵子著書一覧 (抄出)

『素顔の巨匠たち』
朝日ソノラマ 1981年

『世界美術館めぐりの旅』
求龍堂 1985年

『続・世界美術館めぐりの旅』
求龍堂 1988年

『絵の見方・選び方』
PHP出版 1992年

『美術館へ行こう』
求龍堂 1993年

『女だから・女だてらに』
講談社 1994年

『世界の名画100選』
求龍堂 1997年

『ヨーロッパ美術館めぐり』
昭文社 1998年

『C夫人肖像画
—世界の巨匠29人に愛された女性—』
講談社 2003年

『気品磨き』
講談社 2007年

『瓦礫の果てに紅い花
ヒロシマに美術館をプレゼントした男の話』
WAVE出版 2009年

『〈美〉の巨匠たち』
講談社 2010年



連載 博聞意伝 世代を超えて未来を語る

第3回

〔聞き手〕

長谷川智恵子 — 澁澤 健

(日動画廊副社長)

(日本国際交流センター理事長)

作家と歩んできた画廊

澁澤 「博聞意伝」の第三回目として長谷川智恵子さんにご登場いただきました。資料を拝見していただきますと、随分多くの本を出されていますね。

長谷川 たまたま鈴木治雄さんや住吉弘人さんを存じあげていたので『ほぼづゑ』の創刊から同人にお誘いいただきましたが、実は私は、本来文学

指向ではなく、むしろ理数系だったのです。ある時、テレビ局の美術番組を作るお手伝いをするこ
とになり、ホアン・ミロとサルバドール・ダリにイ
ンタビューしました。それが本を出すきっかけとな
りました。放映の後、「そう簡単に会える人たちは
はなく、放送だけでは勿体ない、是非文章に纏め
なさいよ」と勧められたのです。ミロとダリの他
に、その後、ビュッフェ、ベーコン、キリコ、マン
ズーなど、今はもうほとんど亡くなってしまいま
したが、当代一流と言われていた画家、彫刻家に
インタビューし、これらを加えて出版したのが、最
初の本『素顔の巨匠たち』(朝日ソノラマ 一九八一年)
です。そして、おとし(二〇一〇年)、講談社がこ
の本のリメイク版を『〈美〉の巨匠たち』として出
版してください、さらにフランス語版の計画も進
んでいます。この内外の優れた画家、彫刻家の仕
事場を訪れて、取材出来たことは大変有意義なこ
とでしたが、巨匠・名匠と言われる人たちはそう

多くおられる訳ではなく、それで行く先々で訪ねた有名無名のユニークで優れた美術館の紹介に、次第に変わっていきました。それが、これら「美術館めぐり」に類する本で、四冊になりました。瀬澤 もそも、美術、芸術と出会われたのは、こういうことがきっかけだったのですか。

長谷川 結婚したことです。聖心女子大学の在学中で主人（長谷川徳七現日動画廊社長）と結婚して、この世界を知ることになりました。それ以前を振り返りますと、実家の父が実業家でしたが、休日に雨が降るとゴルフに行けないので、よく家で絵を描いていましたね。父は戦前から日本画を習っていて、お正月になると、私たちも色紙に描き初めをさせられたりしました。とはいえ、格別美術に興味があつたとか、美術館に出掛けるということはありませんでした。

画商の家に嫁いで、店舗に展示してある作品とか、画家のアトリエとか、美術史から入るとい

動画廊の店舗であり、これらははっきり分かれています。美術館は、美術館のある地元や広く訪れてくださる愛好家の方々を啓蒙してゆくために、展示会を開催したり、美術品を公開することを専らとしています。一方画廊は、コレクターの方々のお手伝いをして、若い作家を育てていきながら、企業として活動してゆくことを目的としています。瀬澤 なるほど、作家を育てて行くという一面もあるのですね。

長谷川 そうです。画廊といってもそのあり様は



長谷川 智恵子

のではなく、直接触れることで美術に親しんできました。ですから、「美術館めぐり」の刊行にあたっては、美術を一から勉強するいい機会になりました。『世界美術館めぐりの旅』（求龍堂 一九八五年）が最初ですが、この頃は、母校・聖心女子大学がカソリック系だったこともあって、宗教的な題材を描いたルネッサンス以前の絵画をやや敬遠する傾向があつたのですが、鈴木治雄さんから叱られましてね、「智恵子さん西洋美術はルネッサンスから始まるのだから、避けて通らないでしっかり見て来て下さい。」と言われて、宗教絵画を多く展示している美術館にも頻繁に何うようになりました。瀬澤 今日画廊に何うにあたって、これは是非お聞きしたいと思つていたことなのですが、画廊と美術館との経営の違いは、どういうことになりますか。**長谷川** 私どもは、茨城県笠間市に笠間日動美術館を持っていますが、これは公益財団法人日動美術財団が運営しています。この画廊は株式会社日

色々ですが、わが社の場合は、昭和三年の創業当初から、若い世代の作家をも扱う画廊として出発しています。

瀬澤 美術館に展示している作品と画廊の作品とでは、明確な違いはあるのですか。

長谷川 美術館に作品を展示する場合、その作家の画業がうかがえる代表的な作品、あるいはそれに準じた作品を展示し、あるいは相応の作品を借用して来て展示するということがあります。これはあくまでも営業目的ではなく、鑑賞していただくということ。一方この画廊においては、ご覧のように大きい作品も置いていますが、基本的には、作家のその折々の仕事を個展の形で見せたり、コレクターの方々にお求めいただきやすいように展示しております。ここでは入場料はいりませんが、自由にお入りいただきご覧いただけます。以前、この画廊でお見合いをした、というお話もうかがいましたよ。

澁澤 画廊の顧客層といえますとどのような方々ですか。よろしい範囲でお話してください。

長谷川 絵を買われる方、必ずしもお金持ちというわけではありません。やはり文化的素養とでも言いますか、お医者さん、弁護士、文化関係の仕事をしていらっしゃる方が、顧客の中には多いですね。**澁澤** なるほど。では、作品に付けられている値段と、その作者およびその作品の価値との相関関係ということになると、どのように考えればよろしいですか。

長谷川 値段と価値ということになると、必ずしも一致しない場合があります。人気があるとか、今の時代ですから、自己PRの上手な作家で値段が上がっているという場合もありますし、逆にいい作家なのにパフォーマンスが少なく、地味で、埋もれてしまったように思われて、値段が付にくいという場合もあります。また、そういう作家をもう一度引っ張り出して、一般の愛好家に認識

ですから、「将来高くなりますよ」などということは、社員にも言わせないようにしています。長い間において資産になり得るといことがあったとしても、一過性の投機目的の売買とは一線を画しております。

澁澤 そういう価値を付されることが重要なお仕事のひとつだと思いますが、余所よそこにはない独自のポリシーとしてはどのようなものがありますか。

長谷川 やはり、自分たちが扱っている作家へのオマージュ（賛辞）というものはありますね。うちは個展を開催するにしても、企画展示をするにしても、貸し会場ではありませんので、ほとんど、一緒に歩んできた作家、つまり先代の父と歩んできた作家、私たちの代になって私たちと歩んできた作家を、私たちの経験とプライドをもってお勧めしてきたというのが、私たちのポリシーということでしょうか。

主人の代に変わる頃、気が付けば周囲には父より上の世代の作家ばかりで、これでは実際代替

していただくということも、画商としては大切なことだと思います。

うちの画廊では、先代の時代に扱っていた、マーケットにもあまり出て来なくなった作家のご遺族と相談して作品展を開催し、「こんな良い作家だったんですね」というお言葉を頂戴するということがあります。ただマーケットにおいて価格が出来る作家と、そうでない場合もあると思いますし、では、高い値段の付いた作家が、いつまでも高い作家のままでいられるかどうか、あるいは一過性のものがあるのかどうかということは、時とともに浮動するマーケットの不思議さという面もあると思います。**澁澤** ある程度価格があつて、それで価値を感じるといふ場合もあるでしょうね。

長谷川 私どもの場合は、是非作家とその作品に惚れていただきたい。好きな絵を買っていただきたいと願っています。好きな絵を楽しんでいたたく、それが基本だろうと思っています。

わりした時には誰もいなくなってしまうという危惧があり、「昭和会」という次世代の作家を育てるための、コンクール形式の展覧会をはじめました。それが今年第四十八回を数えますが、その昭和会から出て来たトップの先生たちが、主人と私の時代の作家なんですね。ですから、この昭和会出身の作家たちが、うちが育てている、一緒に歩んでいる作家たちということになりますね。

澁澤 その作家を育てるといふことの勘所というと、どのあたりになりますか。

長谷川 昭和会で受賞した作家でも、受賞していない作家でも、うちの体質・スタイルに合う作家と合わない作家がいます。昭和会の審査は、美術評論家やジャーナリスト、トップの作家など外部から招聘した方々を加えた十六、七名の審査員によって行われています。だから、受賞した作家でも、うちと毛色の違う作家が出て来るともありませんが、うちとスタイルの合う作家の場合は、何年か



渡澤 健

のちに個展の開催を持ちかけることもあります。パリにアトリエを持っていきますので、そこを使う権利を与えるとか、フォローをするようにしています。渡澤 私のような素人が絵を選ぶときに、先程画廊のスタイルとおっしゃいましたが、こういうところを見て欲しいというアドバイスはあります。長谷川 まずご自分が好きな一点を探していただくことです。プレゼントして貰う場合、どの絵がいいか。どの絵だったら自分の部屋に懸けておいてもいいかな、ということですね。うちは具象絵

語のようなもので、言葉の壁を超越していますからね。長谷川さんは海外にしばしばお出掛けになるのでしょうか。

長谷川 ええ。パリに支店がありますので、定期的に出掛けなければなりません。それと、二〇〇七年（十月二十四日―二〇〇八年二月二十六日）にパリの日本文化会館で「黒田清輝から藤田嗣治まで」パリに学んだ洋画家たち（De Kuroda à Foujita / Peintres japonais à Paris）」という展覧会が開催されました。これは、パリ日本文化会館開館十周年、東京藝術大学創立百二十周年、そして当時私が理事長をしておりました日本洋画商協同組合の創立五十周年を記念して組織されたもので、ちょうど節目の三者が協力していい作品をパリで紹介しようということになり、この企画に関わりました。

内容を簡単にご説明すると、日本が明治維新で国を開いてから、美術の分野でも海外に盛んに留学生を送り出しました。旧藩が背後で支援したり、

画が中心ですが、ご自分の好き嫌いで選ばれるのであれば、具象、抽象の区別はありませんよね。ご自分の感性でお選びになればいいと思います。

渡澤 先程から拝見していて、どの絵ならば部屋に掛けておきたいかな、と思いつくらせていますが、かねて自宅で見慣れていた作家の、同趣の絵に出会って、不思議な親近感を覚えるものですね。子供の頃からいい絵を見せて育てるといふことは、こういうことなのですね。

長谷川 我が家でも、娘たちの成長時期に、なるべく絵のある環境に馴染ませるようにして来ました。画商のうちですからね。最初は、どこで聞きかじってきたのか、「ルノワールって何？」とか尋ねてきましたが、そのうち絵のある環境にすんなりと入れたようです。

美術の本場パリでの仕事

渡澤 絵のある環境というのは、国際的な共通言語新開財閥の援助を受けたりして。そしてほとんどの美術関係者が目指したのが、フランスのパリでした。パリで学んだ理論や技術を日本に持って帰って、東京野の美術学校に西洋画科を開きました。その西洋画科を開いた黒田清輝をはじめ、東京美術学校で学んだ画家たち十二名の滞欧作とその後の作品五十一点と、黒田がパリで学んだ画家ラファエル・コランの作品を加えて展覧会が構成されました。それで、なんで「黒田清輝から藤田嗣治まで」なのかというと、黒田が一八九〇年から九二年に掛けて住んだ、パリ郊外の村、グレー＝シュール＝ロワンに二〇〇一年十月に、黒田がこの村に住んだ記念として、彼が住んだ家の前の通りに「Rue KURODA Seiki (黒田清輝通り)」という名前が付けられました。フランスは通りによく人の名前を付けますが、日本人の名前が付けられたというのは初めてのようです。

ともあれ、黒田は当初法律の勉強のために渡欧

し、画家に転身して本格的な西洋絵画をフランスで学んで日本にその成果をもたらし、彼が教鞭をとった東京美術学校は藤田にいたるまでの優れた画家を輩出した、ということですね。

澁澤 それで伺いたいのは、「西洋絵画」というように、フランス人から見ると、様式も技法もすべて自分たちのものじゃありませんか。そこに極東から法律を学ぶ学生がやって来て、絵を描き始めた。そして、その画業を評価したというのはどういふいきさつだったのでしょうか。

長谷川 当時は、評価されていたという訳ではなかったようです。この企画のために私もグレーの村を訪れて驚いたのは、セーヌ河の支流ロワン川に沿って開けた小さな閑静な村落で、岸辺の随所には柳の木が枝を揺らしているという、日本の風土を髣髴させるような、水辺の風景がありました。ああいう景色を日本の画家たちは好きだったのだろうし、落ち着いたのだらうと思いました。

その違いに興味を持ったのだらうと思います。フランスで学んだ絵画を独自の表現に仕上げたというところでしょうね。

美と食―日本の優れた感性

澁澤 フランス人の感性にうったえた、日本の美意識ということなのでしょうが、それは究極何なのでしょうね。

長谷川 私は思うのですが、例えば今のフランス料理にしても、日本の懐石料理の影響を強く受けていますよね。世界の料理でおいしいのは、日本料理とフランス料理だと思います。フランスからドイツの方に上がって行きますとおいしいものが少なくなるし、イタリアはパスタがおいしいというのであって、完成された料理というのでは日本料理とフランス料理、バリエーションという中華料理、これが世界三大料理だと思います。

それと、日本に入ってくる世界中の料理が、日

こうして、グレーを訪れるところから、展覧会の準備が始まったのですが、この展覧会で、本格的にフランスで絵を学んだ日本人画家の、十二人五十余点とはいえ、一堂に展示された作品を多くフランス人がご覧になり、どのような評価をしてくれるのか、大変興味のあるところでした。

「所詮俺たちの真似事じゃあないか」と酷評されるのか、あるいは黙殺されるのか、東京藝大の担当者の方たちと戦々恐々としていたのですが、結果百二十四誌紙が取り上げてくれて、一定以上の評価をいただきました。「フランスで学んだ西洋絵画を日本人独自の感性で磨き上げて、一つの絵画表現に高めた」という褒め言葉も多かったです。入場者数も日本文化会館始まって以来のものだったようです。

澁澤 そうですか。フランス人は一体どういったところを評価したのでしょうかね。

長谷川 フランスで学んだ時期の学生時代の絵と、後の画業完成期の作品を持って行きましたから、

本で格段においしくなっていると思います。

澁澤 それはそうですね。

長谷川 美と食というのは同じ感性だと思います。だから、絵描きさん、音楽家、画商、コレクター、皆食べるのが好きです。(笑)

美の感性と食べることの感性、これは一体だと思ふし、これが文化だと思うのですよ。日本の料理を知ること、フランス料理はおいしくなりました。**澁澤** 日本人の美意識というのは世界一だと思うのですが、その根源にあるものは何ですか。

長谷川 近年、東南アジアに日本の画家をお連れして、その風物詩を描いて貰い展覧会を開いたことがあります。それは、作家が是非やってみたいと言われたこともあるのですが、そうして、インドネシアでも、シンガポールでも、香港でも、フィリピンでも、つぶさに見て来て分かったのですが、日本ほど世界の美術品を集めている国はないですよ。それとお料理も日本のようにバリエーションのある

ところはありませぬ。日本がこんな小さな島国で、三百年間も鎖国をしていて、なんでこんなに美術というものに造詣が深いのか。日本という国の素晴らしさを、海外に行つて改めて感じますね。

澁澤 先程水辺の風景ということを言われましたが、私は、日本は「水の文化」だと思つたのですよ。山に雲が掛かつてやがて雨になり、きれいな水が流れてくる。水があれば何とか命は長らえますし、耐えて待つということ知り、いやなことがあつても、水に流してしまふことも出来る。だから、環境というか、生活に恵まれているところがありますね。水がおいしいので料理も磨かれてきたでしょうし、美の感性も磨かれてきた。つまり水が豊かなところから、すべて出て来ているのではないかなと思つたが。
長谷川 俗っぽい話になりますが、日本画だと同じ作家でも、水を描いている絵の方が評価が高く、値段も高いのです。伝統の美をいう場合、大概水が出てきますね。庭園造りにしてもそうです。池

ませぬ。

長谷川 だから、それほど素晴らしい日本の美意識を、一体どれだけの、これからの日本人が持つていてくれるのだろうか、と不安になります。あまりにも一過性のものに、皆が行くところ右へ左へとなびいてしまつて、自分の眼で確かめて踏み出すということが、近年若者にないように思います。自分の言葉で発信しない、自分の言葉で文章も綴れない。

この間、私は台湾に行き、台南の親しい年配のお友達をお訪ねしたのですが、その方が、「日本の統治時代に上下水道が整備されて清潔な生活が出来ようになり、警察が出来て安全になった。

そして治水が整つて農作物が豊かになった」と言われました。中国人社会では、民のために尽くしてくれたことは民が忘れない。日本の政治家などには、戦前戦中のことを過度に卑屈に言う人がいるが、もうそろそろ、その必要はないのではないか。それよりも、後藤新平など台湾の産業育成に

や滝を配したり、枯山水にしてもそうです。

澁澤 そういふものですか。なるほど。

長谷川 中国と日本の庭園を比較しても、日本の庭園の方が格段に美しいですね。太湖石たいこせきというのですか、奇岩を多用した庭作りは、日本の静かな趣きとは大きくかけ離れていますね。日本の庭の精神性は風土としては、日本仏教の「禪」だとか「空」だとかが入り込んでいるように思います。

澁澤 日本の庭と、例えばイングリッシュ・ガーデンを比較した場合、日本の庭は自然を巧みに採り入れていますが、イングリッシュ・ガーデンは、人工的に、自然を矯めていっているというか、美の意識が大きく異なりますね。

長谷川 先程も言いましたが、海外に出て「日本という国は不思議な国だな」とつくづく思います。

澁澤 私は外国、アメリカ育ちなので、外から見る日本という見方が日常でしたが、日本で暮らしていると、そういうことに気付かないのかも知れ

努めた人たちの業績を、日本人はもつと勉強して伝えていくべきだ、とも言つておられました。

澁澤 そうですね。戦後の日本は自らの近代史を封印してしまつていますからね。

長谷川 私たちが習つた日本史にしても、縄文、弥生の太古から明治維新まで、その後の戦前戦中、戦後の歩みがすつぱり、抜けてしまつていませぬ。

澁澤 たしかに、戦前戦中の誤つたことまで肯定すべきではありませんが、客観的な検証の視点を持つべきですね。事実関係を知らない議論にもなりませんからね。

長谷川 だから、日本人というものを再認識するべきだと思いますね。今、私たちが声を大にして、日本人のいい面と、戦争に突入していった誤りの面を、若い人たちに教えていかなければならないと思つています。そうしないと、日本人としての自信も誇りも、プライドさえもない日本人がます

ます増えて来てしまいます。

澁澤 日本人としての誇りを持ちながら、それが驕りにならないことが大切なのでしょうね。ところで、その驕りということになると、どのようなことを指しますか。

長谷川 戦争に傾斜していった時期の軍部は、完全に驕りに固まっていたと思いますよ。国際的な交渉事も、経済のやりとりも総て力で押し通せると思ってしまった。

澁澤 人の驕りというのは、権威ですか、それとも虚勢ですか。

長谷川 話を私の周辺に戻しますが、最初に申し上げた『素顔の巨匠たち』の取材インタビューの時の印象で申し上げます、サルバドール・ダリ以外は、巨匠と言われた人たち皆さん、大変謙虚な方たちでした。とても優しかったし、人間的にも魅力のある方たちでした。お会いする前は、インタビューするといっても、私の英語、フランス語

牡丹をお届けすると、必ずお返しをして下さる方でした。お食事などと呼んでくださる折には、必ず先に着いて迎えて下さいました。先方にとってはこちらは孫世代なのですが、万事そのようでした。

「日本の男子はどこにいったの」

澁澤 多くの方に会われて、得難い体験もされたと拝察しますが、先程から話題になっている、日本の美意識のようなものでもいいのですが、次の世代に伝えて行くとなると、どのようなことになりますか。

長谷川 私のところは娘が三人なのですが、いつも娘たちに言っていることで、若い人たちが皆に言いたいのは、「人間関係を大切にしろ」ということですね。それと、どんなにつまらないと思うような仕事でも、キッチンとやりなさいということ。娘がニューヨークのメトロポリタン美術館で、丁稚奉公のようなことをしたことがあるのですが、コピー取りでも何でも、頼まれたことはキッチンと

ではとても不安だったのですが、帰りはとても心豊かになって帰ってきました。ただ、ダリだけは翻弄されっぱなしでしたが、でもあれがダリの芸術そのものなのかなと、納得はしましたが。

澁澤 それは絵からも想像つきますよね。(笑)

長谷川 この本の素顔の巨匠たちは三十人ですが、こういう画廊を開いていると、通りがかりに立ち寄られたりして、色々な方々の素顔を拝見して来ました。政治関係の偉い方々も、経済界の方々も、新橋あたりでの寄合までに時間があるというので、お寄りになって絵を見て行かれたり、ということもありました。これは、絵描きさんにしても同様ですが、人から偉いと言われる人は、謙虚で優しい方が多いですね。

私が美術のこと、画商のことなどいろいろ教わったのは梅原龍三郎画伯なのですが、出会いは画伯が七十代でこちらが二十代の頃だったのですが、こまかい心遣いをされる方で、お好きな大輪のバラややりなさい、と言ったことがあります。何でもそうですが、そういう小さいことの積み重ねですよ。だから、派手な仕事をいきなりやりたいというのではなくて、手元のことから着実に片づけて、足元を固めることからやっていかないとけないと思います。

それと、少子化が取り沙汰される昨今、男性も女性も結婚をして欲しいですね。まず家庭を築いて、家族を作って、今の世の中それからでも十分やりたい事は出来ますよ。まずは家庭があつて、それから社会があるのですから。子供が出来れば、それは大変なこともあります。子供がいれば未来があるのですから。いづれ孫も加わって楽しみが一杯になりますよ。

澁澤 いま、家庭を持っても外で働く女性が増えてきていますが、日本ではまだまだ社会の第一線は男性ですよ。アメリカでは管理職につく女性の割合は三、四十パーセントで、日本は十パーセ



ント未満だったと思います。おそらく三十年後頃には同じようになるのだろうと言われていますが。
長谷川 そうです。日本はまだ男性社会ですよ。一つは保育所の問題ですね。結婚しても働けるということになると、ハードルを一つ乗り越えられるのですが。フランスだと、うちもパリにお店が

「画家は自由業ではなく創作の仕事です。画家の周辺にはパレットナイフもあれば有毒な絵具もあります。せめて創作の時間の間、子供を預かる便宜を与えて下さい」というような内容です。そうしたら聞き届けて下さって、いま彼女は子供を預けながら制作を続けています。
そうしたバイタリティーのある女性の画家が増えていますよ。コンクール形式の展覧会に積極的に出品したり、文部科学省の留学生派遣制度に応募したり、そして才能のある女性の画家が確実に増えています。

かつて、ダリを取材した折に、「女性は創造者には向かない。子供を作る以外の創造は無理だ。」と言われて悔しい思いをしましたが、今ならば立派に言い返せますね。

澁澤 この対談は次世代にメッセージを語っていただくのが目的であり、長谷川さんにはすでに多くのメッセージをいただきましたが、最後に改め

あるので分かるのですが、子供が出来て一年間、もとのポジションで復職させることを約束すると、国が給料を負担してくれます。二人目のときにはそれなりの保障があるし、三人目になると、国からまとまったお金が出ます。

そういう子育て支援があるし、それに外国人のベビーシッターや家政婦を受け入れるシステムになつているので、働く女性にとってはいいですね。でも日本ではなかなかそういう訳にはいきませんね。先日こういうことがありました。昭和会で受賞した優秀な女流画家なんですが、夫はサラリーマンで忙しく、最初のお子さんは彼女の徳島の実家に預けて絵を描いていたのですが、二人目が出来てそうもいなくなり、地元の保育所に相談したところ、画家は自由業という扱いで、空き待ちのリストに入れられてどうにもならない、と行って相談を受けました。そこで担当の部署に綿々と手紙を書きました。

とお言葉を下さい。

長谷川 やはり、好奇心旺盛で、エネルギーのある人になつて欲しいし、それには人間としての品性とか、自分の歴史を踏まえた、そういう大人になつて欲しいですね。その日その日の糊口をしぐフリーター人生などは、生きている意味がないと思います。もっと貪欲になれば、今すぐにはなくても必ず道は開けてきますよ。

いま海外留学を希望する日本の若者の内、ご存知でしょうか、圧倒的に女性の希望者が多いのですよ。「男の子はどうしたの」と言いたくなります。社会人になつたらなつたで、出張はいや、転職はいや、「日本の男子はどこに行ったの」と言いたくなります。……だんだん若い日本の男の子への叱咤になってきました。

澁澤 楽しい時間をありがとうございました。

(はせがわちえこ／しぶさわけん)

(収録・二〇一三年一月二十二日)